
るいは智を呼ぶ ~ 希望の未来を ~ (智逆行)

sato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

るいは智を呼ぶ 〈希望の未来を〉 (智逆行)

【コード】

N01120

【作者名】

s a t o

【あらすじ】

るいは智を呼ぶFD終章のそして僕らはまた出会うからの分岐です。

白い光と化したやさしい世界での出来事は幻として忘れ去られる。

智は再び、この呪われた世界を抗いながら歩んでいく。

……………はずだった。

プロローグ

完全にはじめて二次創作を作りました。

るい智FDをプレイし終わって、そのままあふれ出たりビドーのま
まに書きました。

反省はしているが後悔はしていない。

ほんとは報告書書かなきゃいけないのに何してんだろ俺。

文才はあるどころか、そもそも文系ですらなくバリバリの理系の自
分ですが、

精魂こめて書きました。

読むだけの自分を卒業です。

尚、同じように読むだけだった *arcadia* のチラ裏にも投稿し
たいと思ってます。

これの使い方もいまいち分からないど素人ですがよろしく願いま
す。

以下プロローグです。

注意 るい智FDのネタばれを含みます。おkな人のみ先に進ん
てください。

街も、人も、

何もかもが白い光となって消えていく。

『 やっつけて、やりなさい 』

最後に聞いた遠い言葉。

全てが幻となって消えていく。

……はずだった。

「にや、あ

」

いつもの自分の部屋で、軽く伸び。

しかし、布団の外の寒さに再びその中に引きずり込まれ……？

思考が凍結する。

が、それもすぐに濁流に飲まれる。

幻が、蘇ってくる。

「覚えて、る。何もかも。何で？どうして？消えて無くなるんじや
なかったの？」

望む未来の模索

姉との決闘

偽りない本心の恵とのふれあい

姉の笑顔

……そして、涙

白い光と化して行く世界

“ やっつけて、やりなさい ”

………そうだ！！

「姉さんっ！」

とにかく何とかしなければ。今の自分が、姉さんに何か出来るとは思えないけど。

『私のことは救えないわ』

あのとときの姉さんの言葉はただの諦めではない。それが純然たる事実なのだろう。

『未来は変えられる。けれど終わってしまったことは変えられない』箱の中の猫だって、入れる前から死んでいたなら話にならない。

でも。それでも。

『僕らが一緒に幸せになれる……』

そんな場所を、今度こそ見つけるよ』

そのためにも姉さ「どうしたの？智？」んを………

再び思考が停止する。

全身も凍りつく。

そして、あの吸血鬼の少女に睨まれたときのように、困惑の感情が爆発した。

しばらくして、体を軋ませながら振り返る。

目に入った光景は、予想通りでありながら、予想外だった。

僕に声をかけた人物は予想通り、姉さんだった。予想外だったのは

………

「ねっ姉さん！？なんで、急にちっさくなってるの！？」
幼女になっていたことだ。

「何を言ってるの？智。急に小さくなるわけないでしょう。寝ぼけているのかしら？」

姉さんの自然な反応にしばし呆然として、周りを意味なく見る。

そこでようやく、今いる場所が自分の部屋でないことに気づいた。

「ここはどこ？なんとなく懐かしい気がするんだけど」
しかも、なぜか落ち着く。
ん？なつかしい？

今の姉さん……………！！

ま、まさか！？

あることに思い当たった僕は自分の手を見る。

……………分かってしまった。

そもそも、起きたとき、違和感に気づいていたのに。
本来ならもうすぐ初夏に入ろうかという時期のはずである。

いくら朝とは言え即座に布団に戻ろうと思うほど気温が低い訳がない。

そろそろ結論を出そうか。

「ええええええええー」

僕は、逆行してしまったようだ。

第一話 考察(前書き)

とりあえず、リビドーが続いてるうちに投稿します。

続きは間が空きそうです。

今度こそ報告書書きます。

第一話 考察

「ここはどこって。自分の部屋に決まってるでしょう？何でいきなり叫びだしてるの？智？」

困惑顔の姉さん

僕の考えが正しいのなら、当然の反応だ。

「えっ。あっ。なっなんでもないよ。寝ぼけてたみたい。あはっははは」

混乱の境地に至り思わず叫んでしまった。

とりあえずここはごまかそう。

「変な智。いつまでも寝ぼけてないで、さっさと起きなさい。

朝ごはんよ。私は先に行くから、早く来なさいよ」

「うん。分かったよ。姉さん」

今のうちに状況を整理しよう。

忘れるはずだった、幻となるはずだった、あのやさしい世界での出来事を。

僕は覚えている。

それだけでも、思考を働かせるには充分なことだというのに。

この状況は何だ？

自分が持っているのは未来視だけだ。

『未来は変えられる。けれど終わってしまったことは変えられない』
姉さんだってそう言ってたのに。

この状況を作ったのが姉さんであるとは考えにくい。

能力を意識して使った経験は姉さんに比べて余りにも少ないにしても。

こんなことが出来るのかどうかは、漠然と理解できる。無理だ。出来るはずがない。

では、この状況は何なのか？

抜け出せない思考のループ

………分からない。まったく分からない。わけが分からないの三段活用。

………つと。なんか変な方向に思考が脱線してしまった。

そこで、不意に空腹であることに気づく。

「まあ、とりあえず。朝食を食べに行こうか」

腹が減っては戦は出来ぬ。戦なんて、そんな大それたことをするつもりはないけれど。

武士は体を動かすのに、僕は頭を動かすのに、エネルギーが必要であることは同じだ。

その量に大きな開きが存在するけれど。

ると僕なんて比べるまでもない。

「るい」

思考の中で出てきた名前を思わず口に出してしまっ。

そうだ。

姉さんだけじゃない。

るい、花鶏、こより、伊代、茜子、恵、央輝、宮。

みんな、何かしら問題を抱えていた。

特に恵。

人を殺さなければ生きること出来ない生き地獄。

初めて会ったときには、すでにその地獄に落ちていた。

僕には、恵をその地獄から救い上げることは出来なかった。
僕には、その地獄へ一緒に飛び込んでいくか、
その地獄から消えていくのを見ていることしか出来なかった。

「絶対に助けなきゃ」

僕はもう、自分がどうしてこうなったかなんてことは、どうでもよくなった。

過ぎ去った過程を理解するのは、同じようなことが起こったとき、対処するために必要だ。

しかし、過ぎ去った過程に意味を求めるのは不毛だ。

そんなことをしたところで起きた結果は変わらないし、同じようなことが起きたときにそれを知っているところで何の役にも立ちほしない。

この状況がどうなって出来上がったのか、それはもう僕に理解できる範疇ではない。

出来ることといえば、その意味を想像すること。そして、それは無意味だ。

ならば、この起こった結果をどう利用するか。

それが、一番重要なことだ。

そうだ。

『未来は変えられる。けれど終わってしまったことは変えられない
ならば、

「終わってしまったことは変えられない。ならば、終わってしまった
ことが未来になればいい」

そういうことだ。

過程が全く理解できない、予想外の結果というこの状況は、
僕にとって歓迎すべき事態なのだ。

あと一手でチエックメイトをかけられてしまっチエス盤を第三者がひっくり返したのだ。

「僕はみんなを助けるんだ」

チエスの駒がどう置かれていたのか。

僕はもう思い出せないことにする。

対戦者がどう駒を置こうが、こうだったと喚こうが、証拠がないの一点張り。

対戦者は、世界だ。この呪われた世界だ。

さあ、仕切りなおしをはじめよう。

第一話 考察（後書き）

まあ、結局何も事態は進展してないですね。
本格的に動くのは次回という感じですね。

第二話 行動開始（前書き）

明日、明後日は確実に更新できません。

さらに夏休みが終わるので確実に更新スピードが落ちます。

目安としてはおそらく週1ペースぐらいになるかと思えます。

それでも、がんばっていきますので、よろしくお願いします。

第二話 行動開始

「つとまあ、決意を新たにしたところでごはんを食べようか」

意気揚々と向かったテーブルの先には

姉さんと後ろ姿の………かあ、さん

そうか、そうだよな。

次第に視界が滲んでくる。

僕の様子に先に気づいたのは姉さんだ。

「何で泣いているの？さっきは叫んでたし。

智、今日のあなたは何か変よ」

そう言いながらも僕の涙をぬぐってくれる。

こちらの様子に気づいた母さんが

「智、どうしたの？」

とあわてて言いながら抱きしめてくれた。

相変わらずの心配性。

僕はそのまま抱きつき、母さんの肩に顔を押し付けながら涙を流した。

「で、いったいどうしたのよ？智」

しばらく泣いた後、姉さんが問いかけてきた。

さて、どうしようか。

さすがに全てをそのまま言うのは無茶がある。

姉さんのことも、あの世界のこと、どうしたこうなったかも。

でも、何も言わないのも不味い。
今の僕の状態は余りに不自然だ。
変な勘繰りで、余計な心配されかねない。

まあ、変な勘繰りや、心配自体はさほど問題はない。
何をしたって今は分かるはずはないのだから。
でも、これからが問題だ。

僕の感覚では今日はパルクールレースの翌日。
昨日は何をしていたかと問われれば、
僕は即答でパルクールレースと答える。

要するに何が問題かというと
僕には今あるはずの記憶がなく、今あるはずのない記憶があるのだ。
このときの記憶なんてもうとっくに忘れているし、
このときの僕に似つかわしくない行動をとってしまう可能性もある。
このままでは絶対、いつかは何かがあったと確信をもたれてしまう。

だから、そこについては正直に話すことにする。
それに、これからの行動がしやすくなるというメリットもある。
さらに言えば、不幸中の幸いというべきか、
僕の能力のお陰でその手の話に説得力をつけるのは容易い。

母さんから少し離れて、姉さんと母さんを見据えながら話した。
「姉さん、母さん。僕はね、10年近く先の未来を体験して来たんだ。
だ。

余りに長くて、現実感があってね、そこが現実だと思ってた。
未来の中で母さんは死んで、姉さんは大きくなってた。
それで死んだと思ってた母さんに会えてほんとにうれしかったんだ」

そして、話している間に僕は気づいた。

これが本当に真相なのではないかと。

少なくとも過去に戻ったというより、今まで未来を見てきたとする
ほうが無理が少ない。

それでも疑問点は多々あるが。

話終えたあと、母さんが再び抱きしめてきた。

「大丈夫だからね。母さんはここにいるわ」

僕は嬉しくて、もう一度泣いた。

「お母様、死んじゃうの？」

「大丈夫、僕が何とかしてみせるよ」

そう僕が答えると、姉さんは安心したようだ。

そうして気を取り直し、別の質問をしてきた。

「智、あなた、力が使えるようになったの？」

「うん、使えるよ」

でも、ここから十年近く先を見たのは僕の意味じゃない。

何でそうなったのかは分からない。

だから、そこまで先を自由に見ることは出来ないんだ」

僕は姉さんの問いかけに正直に答えた。

使えるといっても、あのときの姉さんほど使えるわけではない。

最早、あれは人間の限界を超えている。

あのお香の作用もあったのだろう。

「どうやって使うの？早く使えるようになってお父様の役に立ちたいわ」

「えーと。なんとというか、こうしたいと願うんだ。」

そうすると、どうしたらいいか分かるんだ」

「うーん。何だかよく分からないわ」

お父様の単語に姉さんのこれからを思い出す。

姉さんを絶対にあんなふうにはさせない。
あの世界の、幸せな姉さんにするんだ。

そうになると、当面の問題は父さんだ。

まあ、でもこれについては簡単だ。

今の僕は姉さんほどではないにしろ、正しく能力が使える。

そんなに先ではない未来なら、読んで、引き寄せることが出来る。

しばらくの間、姉さんの他愛のない質問　私が大きくなったらどうなるの？

など　に答えながら、寝るまで過ごした。

その夜、姉さんが寝ていることを確認してから、母さんを起こして、寝室から離れた台所まで一緒に来てもらった。

起こしたときには、すでに何か伝えたいことがあると悟られていた。

「何か、言いたいことがあるんでしょ？」

向かい合って開口一番に聞いてきた。

「うん、そうだよ。」

「未来のことなんでしょ？」

「うん。単刀直入に言うね。」

このままだと姉さんが、父さんに壊されちゃう。

薬を使って姉さんを操ろうとするんだ」

「そ、それは本当なの！？ 智」

母さんは驚いて肩を揺すってきた。

「うん。少なくとも、僕の見た未来はそうだった」

「そう、なの」

母さんは動揺を隠せない。

さすがにこんなことは僕に未来を見る能力があるとはいえ、

鵜呑みには出来ないようだ。

まあ、当たり前か。証拠もないし、僕がうそをついている可能性も

あるんだし。

「まあ、いきなりこんなこと言っても信じられないよね。」

だから、証拠を見せてあげる。これもって、そこに隠れてて指を差して、そう言った。

指示した場所はリビングの扉から見えず、僕からわずかしが離れていない場所だ。

1分後、父さんが帰ってきた。

「お帰りなさい、父さん。待ってたよ」

予想外の出迎えに父さんは驚いていた。

「と、智。どうしてここに？」

「だから、待っていたんだよ。父さんを」

「こんな時間までか？」

今は深夜2時過ぎだ

「5分ほど前からね」

「へー。すごい偶然だな」

何かを期待しているような目になった。

どうも感づいたようだ。

だけど、残念だね。お前の計画はすでに崩壊してるんだ。

「偶然といえば、今日は色んなことなかった？」

そう、例えば、飛行機のエンジントラブルとか、

電車の発進前に発覚した置石とか、

すぐ目の前を高速で通りすぎた信号無視のトラックとかね」

「な、え。ま、まさか」

「この意味が分からないわけないよね。」

「何でこんなことをしたんだ!!! いたずらでは済まされないぞ」

「父さんよりましだよ」

「何を言ってるんだ!!!」

かなりいらだっているようだ。

いたずら感覚で殺されかけたと考えたら当然だけど。

「父さんは姉さんをこれからどうするつもり？」

「父さんの話を聞いているのか！」

「僕の質問に答えるよ！！！！」

「何を言いたいんだ、全く。」

僕の剣幕に出鼻を挫かれて、少々冷静になったようだ。

「父さんも感づいていると思うけど、僕は能力に目覚めたんだ。

そのときに、今からずーと先の未来を見たんだ。

10年くらい先の、ね。

そこで姉さんがどうなったか分かる？父さん？」

自分の計画のことに思い当たったのか、顔が青ざめていく。

「もう一度聞くよ。お前は姉さんに何をやるつもりなんだ！！！！」

「……………」

答えられないようだ。

しばらく沈黙が続いたあと、

「……………どうするつもりなのか分かってるのか？」

「姉さんに薬物使って、利用するつもりだろ。」

姉さんが壊れることも承知で

違う？そんなことないよね？」

「……………」

またも沈黙。

「反論できないみたいだね」

「だったらなんだっていうんだよお！！」

とうとう逆上して襲ってきた。

でも、そんなことは想定済みだ

「やめなさい！！！！」

包丁を持った母さんが後ろからやってきた。

女性といえど、刃物もった相手に父さんは怯んで飛び退く。

「お、お前い、いたのか！？」

父さんは驚愕して母さんを見ている。

その隙に話しかける。

「そうそう、父さん。」

今日は色んなことがあったけど、全部未然ですんでよかったね
ほんとに、運がよかったねえ。父さん？」

話しかけた僕に最初は怪訝な目を向けていたが、

話した内容の意味を理解すると目を見開いて、後退りした。

「今日一日だけでも3回も死んでたかも知れないんだね。」

明日は何回かな？ 生きてるのかな？」

「お、俺が悪かった！ やめてくれ、命だけは勘弁してくれ！」

土下座しながら僕に懇願する。

「じゃあ、言うこと聞いてくれる？」

「聞く！ いくらでも聞いてやる！ だからやめろ、やめてくれ！」

「まず、母さんと離婚しろ。母さんもそれでいいよね」

「ええ、いいわよ。こんな人に未練はないわ」

「今後、一切そっちから接触してくるな。少なくとも県外に行け。」

生活費としてこちらに毎月50万渡せ。とりあえず条件はこれだけだ。

あとは何かあり次第こちらから連絡する。

こっちに何かしようとしたら、どうなるか分かるよね」

「分かった！ だから殺さないでくれ！」

「2日後、こちらから連絡するから、それまでに新しい住居を決めておけ。」

おまえの私物を送ってやる。だからさっさとここから出て行け！

「！」

そう言うと、父さんは慌しく出て行った。

「はー。やっと終わった」

僕はやっと緊張から解放された。

「智、ごめんね」

そばにいた母さんが抱きしめてくる。

その謝罪は色んな意味が込められていた。

「いいよ。母さん」

僕は母さんを許してあげた。

やった。ついにやった。救えたんだ、姉さんを。

僕は喜びに打ち震えた。

この呪われた世界に一泡吹かせたんだ。

ああ、今夜はいい夢が見られそうだ。

第二話 行動開始（後書き）

取り合えず、姉さん救出。

次回は今後の方針決めになるかな？

とりあえず予定は未定です。

第三話 繋がる家族（前書き）

本当は土日更新する予定だったのですが、遅れてしまいました。あと、今週の土日は月曜日が祝日でバイトが忙しくなりそうなので、次の更新は週末前か後になりそうです。

第三話 繋がる家族

ここはいつもの溜まり場

「センパイ、センパイ。今度、鳴滝の学校に遊びにきませんかー？」
僕の腕をとり、小動物のようになってくるこより。

「こよりの学校ってもうすぐ学園祭あるんだっけ？屋台とかって出るの？」

隣に座るは食欲魔人のるい。もう呪いは解けたっていうのに相変わらずの食欲だ。

あの食欲はどうやら才能に無関係だったようだ。

「あなたはそれ以外に気にすることはないの？」

呆れ顔の伊代。

「こよりちゃんの学校ですって！？ ジュルっ想像するだけでよだれが出てきたわ。むしろ、今から行きましょう」

新しい狩場を見つけて、獲物を待ちきれない花鶏。

「そして、愛と勇気しか友達のいないそれ行けレズリアンの犠牲者が新たに生まれるわけですね。分かります」

今は手袋をしていない茜子。その言動はこれからも変わることはないだろう。

「あたしは行かんぞ。馬鹿馬鹿しい」

央輝は口ではそんなことを言うけれど、結局、みんなに合わせて来るだろう。

ツンデレさんだ。

「僕は学校行事には一度も参加したことがなくてね。よかったら僕も招待してほしいな」

見た目の上ではこの集団の黒一点の恵。イケメン度がものすごい。男として凹む。

「宮は、和久津さまが行かれるのでしたら、どこへでも。それはもう、地獄の果てでも」

さすがは天災さん。最後の一言が余計なのは最早デフォだ。そうしてみんなと話しているとポケットの中の携帯が震えた。ポケットから取り出して確認する。

姉さんからのメールだ。

『今日は外食しに行くから、余り遅くならないようにね』
僕は分かったと返事を出しといた。

「それで、どうですか？智センパイ」

こよりの問いかけに返事をしようとして………
したところで起きた。

いい夢だった。

呪いを解いて、みんなと他愛のない時間を過ごす。

まさに、僕のこれからの理想形。目指す未来だ。

ただ、納得できないことが一つだけある。

「なんで僕は女装したままだったの！それだけは避けられない運命だというの？」

夢の中でさえ徹底されるとは思わなかったよ！」

何はともあれ、とりあえず起きることにした。

布団の誘惑に抗いながら、昨日というより今日の深夜にやったことを思い出す。

姉さんを助けるため、父さんを説得したことだ。

これで、薬で壊されることはなくなった。

姉さんに関してはもう、これで大丈夫なはずだ。

残りの問題を考えよう。

やはり、一番重要なのは恵のことだ。

しかし、早急にやるべきことがいくつもある。

央輝のこととるいのことだ。

央輝は中国にいたころは、僕の想像を絶するような、とても辛い経

験をしたらしい。

これからすると分かっている、放置するなんて僕にはできない。いろいろの場合はあるいを愛するが故にすれ違う父親。夫をみて自分も何かるいにしてやろうとして、呪いを弱めるために命を落とした母親。また、それらや、才能や呪いの制約が原因の孤独から助けたい。

才能を使えば何とかなる。

……………姉さんならば。

僕にはできない。

今の僕は自分の才能を認識し、完全にコントロールできている。しかし、僕にはできない。

単純な話だ。才能の限界だから。

呪いはもともと僕に備わったものではないのだ。

姉さんのスペアとして、呪いを移されただけだ。

呪いを持つが故に才能を持つが、それは呪いについてきたおまけみたいなものだ。

早い話、才能が劣化しているのだ。

僕の才能は『望みの未来を引き寄せる力』。

この才能名だけだと誤解されやすいが、この才能の本質は『確率変動』だ。

そもそも確率の存在しないことは起こせないのだ。

箱の中の猫の生死を自由に操れても、その猫を犬にしたりはできない。

そこらへんは某ラノベで出てきた超能力理論とほぼ同じだ。今は関係ないけど。

まあ、ともかく。それが才能上、大前提となる制約だ。

僕にはその他にも、劣化が原因と見られる制約がいくつつかある。

一つ目、操作可能な未来の範囲

僕の場合、がんばっても二日ほど先の未来しか分からない。

これは姉さんに比べかなり劣化している。

二つ目、対象の認識の詳細化

ある人物の未来を視たり、操る場合、その人物を明確に認識しなければならぬ。

るいや央輝の場合、あのとときの姿は認識できるが、今の姿が分からないので使えない。

三つ目、自分に対する才能の使用

まず、未来を操作することはできない。

視ることは出来ないことはないが、断片的で余り使い物にならない。

ただし、直感に関しては使える。

この直感は自分に対する才能使用の劣化したものだと思う。

単純なこと 誰かに会いたいとか、何かから逃げるなど に

対して、

どうすればいいのかが漠然と分かる。

とりあえず、以上が僕の才能の考察だ。

というわけで、央輝やるのを助けるには直接会いに行かなければならない。

そのためには情報収集だ。

あいつにるいの家を聞いてみよう。

あいつはるいの母親がした呪いを弱める方法を教えたか、聞きにいった可能性がある。

直感に頼れば行けないことはないだろうと思うけれど、正確な情報があるほうがいい。

あいつに電話する。

結果、るいの自宅が分かった。

母さんを説得して、会いに行くことにする。

朝食を食べ、少しまったりしてから、

「僕は今日、行きたいところがあるんだ」

「どうしたの？ いきなり外へ行きたいだなんて」

母さんは少し驚いているようだ。

「本気なの？」

姉さんは驚きよりも、ふざけたことを言っていることに対する怒りを感じる。

「呪いのことでどうしてもしたいことがあるんだ」

「いいわよ」

「「ええっ!!」」

余りの即答に僕はもちろん、姉さんまで驚いていた。

「それなら、好きにやりなさい。後悔しないようにね」

母さんが笑顔と共にそう言ってくれた。

昨日の出来事で、僕の世界年齢が見た目相応ではないこと気づいたようだ。

「ありがとう」

と、僕も笑顔で答えた。

姉さんは少し不満顔をしていた。

出かける前に確認することがある。

「姉さん。僕の呪いを移すことはできる？」

「できるわ。そんなことは知ってるでしょう？」

いきなり問われて困惑顔の姉さん。

「じゃあ、僕が離れたところでもできる？ 時間はどのくらいかかるの？」

すると、姉さんは思案顔になり、

「そうね、時間はかからないわ。2、3秒でできるわ。」

ただ、離れると無理ね。基本的に智に触れていないとだめだわ」と、答えた。

姉さんの答えは僕の予想通りだった。

才能の共有に関して、あのとときの姉さんほどできないようだ。

「そうなんだ。なら今、僕に呪いを全部移してほしいな」
普段はリスク分散ということで、半分半分くらいにして呪いを弱めている。

片方が発動しても、片方に呪いを移して逃げ切る確率を高くするためだ。

それに姉さんは今は使えないが、この方法は同時にどちらも才能が使えるので、

逃げ切る確率がさらに高くなる。才能は分散した分だけ弱くなるが、今は、何かあったときのために、才能を完全に使える状態にした
い。

「いいけど、危ないわよ」

「うん。分かってる。でも、僕には必要なんだ。おねがい」

僕は姉さんに手を合わせて拝んだ。

「智がそこまでいうならいいわ。ただし、私を連れていきなさい。

私だって智のことを心配してるのよ。」

それに、そうすれば呪いを踏んだとき対処できるでしょう?」

確かに、姉さんの言うことは正しい。

僕としては、あいつのことなど未来のことに關して、

できるだけ感づかれないように母さんと家に居てもらおうかと考え
ただ、

姉さんの言うことに表立って反論できないし、

呪いの移動権は姉さんが持っているのだ。

ここはここはおとなしく折れるしかない。

「わかったよ。姉さん。一緒に行こう」

「じゃあ、移すわね」

姉さんは僕の手を取り、呪いを移した。

姉さんが一緒に行くことになったので、母さんも一緒に行くことになった。

外出する準備を済ませ、玄関に立った。

「三人でお出かけするなんて初めてよ。わくわくするわ」

「そつだね」

「そつね」

珍しくテンションの高い姉さんに、笑顔で答える僕と母さん。

「それで、智はどこへ行きたいの？」

「皆元るいってという名前の呪い持ちの子に会うためにこの住所に行きたいんだ」

そう言つて、僕は母さんにあいつから聞きだした住所のメモを渡した。

母さんはそれに目を通して確認しながら、ドアを開き、言った。

「それじゃあ、行きましようか。いってきます」

母さんを真ん中に、左に僕、右に姉さんで手を繋いでいた。

姉さんのテンションに当てられ、僕の気分も高上していた。

「「いってきます」」

そう言つて出かける三人の姿はどこにでも居そつな幸せな母娘そのものだった。

第三話 繋がる家族（後書き）

次回、るいに会いに行きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112o/>

るいは智を呼ぶ ~ 希望の未来を ~ （智逆行）

2010年10月9日09時55分発行